



写真提供：小林 勝利氏

山里や 秋を隣に 麦をこぐ 正岡子規

どこか懐かしい山里の風景。

待ちかねた秋の到来。コロナに酷暑にマスクと、今年の夏は厳しいものでした。

その分、朝夕の涼風はいつもに増してうれしく感じます。

季節は確実に移っていき、恵みの秋をもたらせてくれます。

出版物紹介「おもかげの昭和へ」……小林勝利	2	キルギスタンからコンニチハ ㉞ ……氏原名美	6
目立ち過ぎぬ・、の描写 ……飯谷 仁	2	出版物紹介 ……	7
おのころじま奮染記 20 ……田島征彦	3	印刷屋さんの「すったもんだ」 ……永野正将	8
いろいろかいろ 天 ……安藝真一	4	わが家の太郎 ㉞ ……永野雅子	8
新聞余話⑫ ……大澤重人	5		

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

出版物紹介

おもかげの昭和へ

小林 勝利



発行：小林勝利写真集刊行会
発売元：(株)飛鳥
A5判 288頁 定価 1,819円(税別)

連日、大勢の人で賑わいました。なにげない日常の記録写真が多くの方々に喜んでいただけたと思っています。そんなことがきっかけで、高知新聞紙上での連載の話をいただきました。

連載では、ご夫婦やご家族など、八十人以上の皆さんから聴き取りを行いました。連載の話をいただく一年ほど前から、既に九十歳以上のお年寄りを訪ね、写真を撮っていました。その中に鳥形山西北側の中腹、海拔七〇〇から八〇〇メートルの都集落に暮らす故西森幸恵さん(享年九十三)がいました。西森さんを撮影するきっかけは、二〇〇七(平成十九)

迎える準備や古のしきたりを受け継ぐ正月の二つの行事(一つは書初め、あとは年末に準備したお正月さまを、畑にお送りする鉾初め)に興味を持ちました。放送後、お二人を訪ね写真を撮らせていただいたことでした。

九年後、九十歳を超した西森さん夫婦を撮影するため再訪しましたが、夫の将信さんは既に亡くなっていました。ご夫妻を撮影したときと同じ庭で、幸恵さんのポートレートを撮らせていただきました。

今回の連載で都集落のこの伝統行事を記録に残したいと、実は幸恵さんを訪ねたのです。ちょうど、次男さんが孫を連れて帰郷されていて、お孫さんは「おばあちゃん

令和二年三月、隔週五十四回二年三ヵ月にわたる高知新聞紙上「おもかげの昭和へ」の連載が終わり、九月一日には、私たち夫婦の金婚式に合わせて写真集を出版することができました。

二〇一五(平成二十七)年十月、仁淀川町の町村合併十周年に合わせた「第二十二回移動高知新聞ふれあい高知in仁淀川町」の一環として、第十九回酒田市土門拳文化賞(二〇一三年三月)の受賞作品展が開かれ、撮影した地元での開催ということもあり、会場は



が新聞に載ったらしいにねえ!」と言ってくれたのですが、幸恵さんは「記事にするのはかまいませんが、写真が出るのは絶対に嫌!」と固辞されました。それで、新聞掲載は断念したことでした。

目立ち過ぎぬ、の描写

繊細にして精妙な

文字表現と配列

中内清子さん早世を惜しむ

飯谷 仁

腺病質らしい印象でしたが、思いがけぬ急逝でした。濃やかに配慮された素晴らしい文字表現・配列にいつも助けられ、感銘を受けていました。

表題・副表題の的確な文字設定、活字大小・濃淡の選択、ハイフン・ダッシュの微妙な長短、ポツ点の描写など、すべてに細心の均斉感覚を効かせた紙面構成に意気投合する日常でした。

生涯唯一の作品集『美と芸術短評集』出版の際には、無理難題を快くひきとって、こともなげにこなした天分の輝きがあったことを、懐かしく想起しています。

実に惜しむべき早世であり、心よりご冥福を祈念いたします。

(3) かわら版

敗戦の年の12月9日。朝方、淡路島の岩屋港から明石への連絡船、せきれい丸は、魚や野菜などの食料を運ぶ人や、町へ買い出しに行く人たちを、定員の3倍も乗せて出港した。その日は晴れていたが、高い波と強風にあおられ、あつてなく沈んでしまった。三百人の乗客は、せきれい丸と共に沈んでしまい、助かったのは、わずかに45人だった。

それから75年が経って、ぼくは淡路島に住んでいる。妻の英子の俳句の師匠、大星たかし先生は、せきれい丸から奇跡的に助けられた一人であった。当時は16才、今年で91才になられる。

弟子の一人に、夫が絵本を出しているもの

おのころじま 大奮

ふんせんき

田島征彦

20. せきれい丸

がいることを知って、「是非、せきれい丸のことを絵本にして欲しい」と言ってきた。

今までに一般の人から、そんなことを言われたことは幾度かあった。絵本が簡単に、できあがると思う人は多い。事実、そんな絵本はあるし、それができる絵本作家も多い。ぼくにはできないから、3年も5年もかかっている。それを英子は知っているから、丁寧にお断りしてくれた。しかし、先生の想いは激しく、そのうち、英子も一緒になって懇願し始めたのだ。妻にまで、ぼくは理解されていない。怒りが頭の先から噴き上げてきた。



ぼくはもうすぐ81才になる。今までの様に思うまま、怒りを噴き出すわけにいかん。少しのところ、思いどまった。ぼくの気ままな生き方は、英子にはたたくさんの苦勞や、苦しみをさせてきた。結婚して50年になる。何とか、願いに応える努力もしてみよう。その時は、まさか、せきれい丸が、絵本になるなんて、思っていなかった。早く言えば、お茶をにごすくらい

のことしか考えていなかった。淡路島に絵本の文章を書く婦人がいる。彼女に声をかけてみよう。彼女に「せきれい丸」の童話を書いてもらい、それに絵を付けることを提案してみようと思った。

彼女へ手紙を書いたら、すぐ、物凄く驚きと喜びの返事がきた。ただただ興奮しているが引き受けるということだろう。もしも、絵を描くなら、75年前の淡路島の様子を調べてみなければいけない。それでも、ぼくに少しでもやる気があることを英子に示さねばならない。英子の車で、岩屋港へ何度も取材に出かけた。当時、13才であった現役の漁師さんに出会った。88才なのに一日中船に乗って漁をしている。主人公を俳句の先生から老漁師に移して、イメージを抜けていくと、面白いほど75年前の淡路島に絵本が展開していった。そして、思いもしなかった、感動的なものになり、出版社の編集者も、大星先生も、手を打って喜んでくれた。童話作家の女性の助けも借りて、淡路島の方言も入れた。

この絵本は、俳句の先生ではなく、50年間付き添ってくれた英子に捧げようと思う。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じこくそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」が最新作。「せきれい丸」は今年の十一月にもくもん出版から出る。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

い ろ ろ か い ろ

その二十八



今どきの神風

安藝眞一

気がつけば「白露」いつの間にか秋の風。日ざしは強くても、間違いなく季節のときが進んでいく。足どりがいつになく速く、季節の色も匂いも、たたみ込まれる様に消えて寡黙に過ぎていくこの半年。何がというは新型コロナのこと、ただ一つの正体。新型というからには旧型もあったろうが、

その記憶も区別もないままに地球上に蔓延した。世界中の政治家、学者、医師を先頭に社会活動の偉人、賢人が意見と対策を連日連呼するが決め手はない。物いわぬ相手は暗く重い。

疫病の暗さは、いつかの戦争の日々を思い返して似ている。生まれた時には日支事変の最中だったし日を待たずに満州事変へと進んだので、戦争の空は当り前で暗れていても光がなく毎日が曇り空で、子供ごろこにもそれが当り前の暮しと納得していた。学校の入口には奉安殿という祠があつて、それに一礼するのが規則。中には天皇陛下の写真があるという噂にも真面目に一礼する。教室の壁には大きな地図があり日本は赤色。北海道、九州、四国、もちろん本州も赤色ベツタリで、朝鮮半島も満州も赤、台湾も赤色だった。侵略という言葉はなく占領。しかも悪い国をこらしめて日本に、といういわば桃太郎の鬼征伐のようなものと教えられ日本は偉い国なのだと思ひ込んでいても、何やら世の中は曇り空だった。真珠湾からシンガポール陥落までは万歳が続いたが昭和十八年ごろから勝利の報せが少なくなり新聞の見出しも

小さくなり、負けてはいまいが勝つてもないのは確実で、大人も子供も無口になって日ざしが弱くなる。街が暗くなる。

そんな日々が続くころ元寇を映画化した作品が上映され、連日の大当りと人々が押し寄せた。タイトルは「かくて神風は吹く」というもので、毎日が行列の人波。それをかいくぐって見た蒙古襲来の恐ろしさに声をあげて見入った。映画の終り近く、九州の海に入つた蒙古の大群勢に突如、神風が吹いて敵軍を海中に沈めるというのがクライマックスで拍手が起くる。子供ごろこにも安堵するラストシーンに黒山の大人達も感動して立ち上る。

現実の太平洋戦争は勝利もなく日が明けて昏れ、街中から食べ物も何もかもが消え雨戸を締めた店が増えた。それでもいつかはやがて神風が吹くという思いが街に沈んでいく。ドイツのヒトラーの映画も来た。「世界に告ぐ」というタイトルだったと思う。これも、すさまじい人気で切符売場には警察も来て黒山の入場者の整理をしていた。これもまぎれ込んで観たが何やらやかましく怒号ばかりがくり返す、むつかしい話だった。

場内の大人の顔は暗闇の中で白く、声をかけると突き倒されそうな恐ろしさがあつた。息が出来なかった。

それから一年程で、アッツ島の玉砕を知る。勝利の報らせが切れて沈黙の一年後が玉砕ではじまつた。初めて敗けるかも知れないという気がしたが、誰にも話せなかつた。それでも防空演習で身を整えたのは、やっぱり神風の吹く日を待っていたからである。その期待も裏切られ、街は火となり、家も灰になった。

首長のことごとくが、コロナの世を見渡して「国難」という。私が国難という話を知つたのは今でなく、「かくて神風は吹く」の時代の歌に「一國難ここに見る、弘安四年、夏の事」というくだりがあり今も時々唄つたりする。元寇が国難ならばコロナも国難か、打つ手もなく季節を半年もたたむなれば、今こそ神風が吹き疫病を南の海に沈めてもらえぬものかと思う。終戦の日を含めて七十五年が過ぎたこの曇り空を吹き払う野分に会えないものかと思うこのごろである。

了

(5) かわら版

遅ればせながら映画『新聞記者』を見ました。日本アカデミー賞で作品賞など三部門の最優秀賞に輝いた評判通りの力作でしたが、元新聞記者が見ると、苦笑いせざるを得ない場面もありました。

一番ありえないと思ったのは、ヒロインの女性記者が取材中にメモ帳を取り出す場面です。「えっ、何がおかしいのか」と思われるかもしれません。

野球の試合後にメモ帳を片手に監督の周りに集る記者の姿はおなじみでしょう。記者会見場では、メモ帳ならぬパソコンに内容打ち込む姿も記憶にあるでしょう。取材の大半は、そうやって取材対象者の目の前でメモ帳などを開き、相手の言葉を記録します。

それができない、いやしないほうが良い取材があるのです。この映画で言えば、渦中の人と喫茶店で一対一で対峙したり、核心の情報を握る中央官僚を出動途中につかまえて質問をぶつけたりする取材です。

取材になかなか応じてくれない人から話を聞く場合、メモ帳は出しません。立場上、本来なら口に出したくないことを、無理矢理にも聞き出そうとすると、メモ帳



映画『新聞記者』の番組予告

新聞余話 ⑫

大澤 重人

元記者が見た映画『新聞記者』



- (映 画) ・主見出し＝白岩聡元大学教育局長
・協見出し＝在職中から野党議員と不適切な関係
- (代替案) ・主見出し＝元文科局長、不適切な関係
・協見出し＝在職時に野党○院議員と
(○は「衆」か「参」を入れます)

を出す、警戒されてしまうからです。

かといって、無断で録音機器を使うのは、取材倫理から外れる行為です。では、どうするのか。頭に刻み込むのです。どの順番で聞くのか、どんな言葉を使うのか、事前に策を練らねばなりません。

業界の笑い話です。警察官宅に夜回りに行き、せっかく聞き込んだ情報を正確に記録しようと、その都度トイレを借りた記者がいたそうです。事情を察した相手が「ええから、ここでメモしろ」。

◆

映画には、別表上の見出しが並ぶ紙面が登場します。

主語のみという主見出しはありえません。主見出しだけ見れば大づかみで内容が伝わらなくてはいけません。文字数も長過ぎます。

「局長」「野党議員」もいただけません。いろんな組織の局長があり、市町村議員もいます。官庁名と衆参の別は明示すべきです。

この女性記者が、電話の受話器を右手で取ったのも「？」。利き手を使ったら、

メモが取れないからです。また、記事化前の原稿を通常、外部の人に見せることもしません。

別の意味で気になる場面も。誤報したとして自ら死を選んだ父について、この女性記者が「そんなに弱い人じゃない」と述べます。自死は「弱い」からではなく、「追い込まれた末の死だ」というのが、新聞記者時代に取材した多くの自死遺族の思いでした。

◆

八月末の安倍晋三首相(当時)の辞任会見。「体調の悪化を伏せていたのは、連続在任記録が最長になるのを待っていたからではないか」「国民の負託に自信を持って応えられないのなら、なぜ代理を置いてすぐにお辞めにならないのか」――。問いただすことが幾つもあるのに、記者からは遠慮気味の生温い質問が相次ぎました。

映画ではなく、本物の記者会見を見て、「こんな質問をするのは記者じゃない」と嘆かなければいけないなんて。

この日、新聞は数多くの国民の信頼を失いました。



キルギスタンからコンニチハ ⑦⑧

COVID-19 パンデミック、キルギス事情 (2)

氏 原 名 美

うじはら・なみ

越知町出身。北海道大学卒。キルギス共和国ビシケク国立大学（旧称ビシケク人文大学）教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

交辞令にすぎないようだ。ところが、かつての教え子から届いた次の報告からは、全く違う景色が見えてくる。

新型コロナウイルスとの闘い
〜災い転じて〜「希望」が見えた〜

キルギスでは三月十七日に最初の感染者が確認されたが、しばらくは状況が悪化することはなかった。感染確認地域は即時封鎖され近隣地域の村も町も互いに往来を禁じたからだ。しかし六月に非常事態宣言が解除されて感染者が急増した。人口あたりの感染確認数でキルギスが世界のトップになった。キルギス社会にとって新型コロナウイルスとの闘いは独立以来最大の試練となった。

ボランティアとして治療の最前線に動員されていた女子医学生が過労死した。国立病院の入り口で息を引き取った人が二人。医療現場は逼迫していた。医療用のマスクも防護服もなく、ベッドも足りなくなった。しかし、もともと国家制度が脆弱なキルギス、政府にはもう緊急支援を行う余力がなくなっていた。

そうこうするうち、ソーシャル・

ネットワーキングのサイトに「求む寄付！〇〇州×町×町の病院が危機に瀕している！」というようなメッセージがいくつもアップされるようになった。発信元は知人や親戚を通じてキルギスの窮状を知った世界各地の様々なキルギス・コミュニティだ。しばらくすると寄付金と支援物資が届いたことが現場で働く人々の写真とともにサイトに報告された。

ベッドが足りなくなると、スポーツクラブやホテルのオーナーが無償で建物や部屋を提供した。一般市民も自分の住まいを開放して感染者を受け入れた。国外からは医療専門家がキルギスの肺炎との戦いのために次々と一時帰国してきた。医薬品、マスク、消毒液、注射器、検査キット、さらには救急車もキルギス国内外に住む一般市民からの募金で購入した。多くの人がその日暮らしで手元にはせいぜい三日間の生活費しかないというのに、みな率先して共同体の一員としての役割を果たそうとした。

大人たちが助け合いに奔走するのを見て、十歳のアイラット少年は自分も貢献したいと考えた。そして、ちゃんと世話をしたら売り上げを自分のものにしていいと言

われ、雛から育てた鶏二十三羽をビシケク市内の食堂に寄付することにした。食堂が病院スタッフに無償で食事を用意していたからだ。

九月に入ると人口六百二十万のキルギス全土で、感染者数は四万五千弱、亡くなった人は千五十人余りにもなったが、一日あたりの感染者数は七十人前後と、六百人以上だったピーク時と比べてかなり落ち着いてきた。

この夏、人々は感染拡大に伴う悲劇に打ちのめされそうになった。しかし、コロナとの闘いは、誰もが一人ぼっちではないことを再確認させてくれた。私たちの社会も捨てたものじゃない。

ベクトウルス・ノフ・ミルラン記

教え子たちから届く「キルギスタンから」のメッセージをこれからも皆さんにもお伝えしていきたい。キルギスで育った日本語エキスパートたちの思いと活躍を多くの方に知ってもらえたらと思う。

了

新型コロナウイルスの感染者た
たきが収まらない。文部科学省が
感染者に対する誹謗中傷をやめる
よう、児童生徒と学生、教職員及
び学校関係者、そして保護者や地
域住民に訴える「緊急メッセージ」
を発出する事態となった。

匿名という隠れ蓑があれば差別
もいじめも大手を振るう日本社会
では、思いやりも「お互い様」の
労いも、所詮は顔を合わせての外

出版物紹介



山岸孝子句集 遍路径



著者・発行者：山岸孝子
四六判 192頁

句集『遍路径』はその集名が示すように、祈りの旅路であり、脈々と続く旅路である。日本の季節、日本のことば、風土に育まれた人の心をあらためて省みさせる魅力を持っている。

— 深沢暁子序より —

先生方や多くの友人との出会いや自然の季節感に浸る小さな感動を大切に、楽しく充実した余生を過ごしたいという願いが籠められた初句集。「現代俳画かぶらの会」代表でもある著者の俳画が彩りを添えています。



戦争に反対した人々

侵略戦争をしていた時代の日本で、戦争に抵抗した人々、四十人余りを紹介した二冊。治安維持法という法律で、それらの人々は捕えられ、時には警察署内で殺されました。その人たちの苦難の物語を追いました。趣味は、本を出すことという著者が、『手塚治虫の戦争反対の情熱』につづいての出版です。



著者・発行者：藤原義一
A5判 300頁
定価2,000円(税別)

納経帳のプレゼント



昔、弊社が大変お世話になつた徳島県の山川製本所の山川光磨様が、かわら版で中内室長の計報を知り、引退後、奉仕で作つておられる納経帳をご供養にと持ってきてくださいました。色とりどりの納経帳、匠の技が光ります。「中内さんには大変お世話になりました。ありがとうございます」と、惜しんでくださいました。

いつか又、八十八ヶ所詣りをしたいと思います。その時は中内さんと…。

永野雅子 記



創立120周年記念誌



発行：学校法人高知学園
A4判 298頁

学校法人高知学園様の「創立120周年記念誌」が8月に刊行されました。

明治32年に江陽学舎として開校以来、長きに渡り多くの卒業生を送り出されてこられた名門校の120年という輝かしい歴史と、関わってこられた多くの人々の「学園愛」が詰まった貴重な記念誌となっています。

印刷屋さんの「すったもんだ」

代表取締役 永野 正将



前号の「すったもんだ」で、新型コロナウイルスによる影響について「当社もそれなりに影響をうけております」と掲載をいたしました。しかし投稿直後からかなりの影響があり、厳しい状況が続いてまいりました。

最近になって戻りつつあるような気もしておりますが、まだまだ回復とはいえず、これからコロナの次の波がどう影響してくるのか心配している所です。

そんな中、withコロナ、afterコロナという観点から社内でも協議を重ね、名入れ抗菌マスクケースのご提案や、自費出版の企画商品の準備など着々と進めてきたことや、デジタル事業であるWEB制作、ARスタンプラリー、動画撮影及び編集といった業務に対してこれまで以上にお問い合わせをいただく機会も増えており、新しい分野や今後伸ばしていける業務が見えてきたことは幸いと言えます。

飛鳥はまだ進化をしておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

わが家の太郎 49

いつもの暮らし

永野 雅子

「コロナ」、「パンデミック」、

「クラスター」、「ソーシャルディスタンス」、今まで聞いたこともない言葉が毎日のようにニュースに流れて半年余り、想像もしない事態に世界中が翻弄されている中、後期高齢の身にはいささかこたえる。

何を用心すればいいのか、家に閉じこもるわけにもいかず、やたら手を洗い、消毒をし、戦々恐々の生活。

とにかく免疫をつけようと、地元の野菜を使った料理に新鮮な魚、美味しい果物、好きなスイーツと、食している内に体重が……。

あわてて太郎を連れて散歩。

お医者様には

「犬の散歩は運動ではありません」と言われているけれど、しないよりはましだろうと外へ。太郎

も最近自分から歩いてくれるようになった。

とは言い、先日雨の降りし

きる中、外から声がするので行ってみると、太郎が近所の暗渠の中に落ちて、いくら呼んでも奥へ奥へと行くものだから、とうとう息子が腹ばいになって入り、連れ出した。うっかり締め忘れた木戸から出たらしく、目が見えなくても脱出はしたいようだ。

明け方や夜中には相変わらず大声で鳴くものだから、そのたびに起きて薬を缶詰肉に入れたり、薄めた牛乳に混ぜ込んだりしながら

「いつまでこんなことが続くのだろう」とつぶやく。

近所の大型犬「ハナちゃん」は17才で、毎朝夕、奥さんに連れられて歩いているけれど、おとなしくて鳴き声を聞いたことがない。

「何も言わないから、行きたい

ろうと思っ歩いていきます」と、奥さん。

この違い。比較するわけではないけれど、

「まだ聞こえんか、わからんか」と言わんばかりの大声に、いくら認知症と言われても、「いいかげんにして」と思ってしまう。

でも考えてみれば飼犬のことで悩ましいなどというのは贅沢なことかもしれない。

毎日のニュースで、明日の暮らしが見えないと言う人が沢山いる中で、いつもの暮らしがいつものようにある幸せを感じなければ、申し訳ない世の中なのだから。

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役

